

浅間山麓に“陸舟”で押出した花蹊と門下生の学び舎

—軽井沢「霊秀山荘」新築から戦後の浅間寮・演習林まで—

跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部 観光デザイン学科 元教授

小川 功

I. はじめに

「熔岩窟ふもと八秋の千草かな」

これは跡見学園の学祖・跡見花蹊が大正5年8月28日、77歳の喜寿を記念し軽井沢に別荘「霊秀山荘」1)を新築した折に、浅間山麓の鬼押出しに遊んだ際の句で【写真-1】の「浅間山中」の画と共に校友会誌『汲泉』に寄せたものである。

筆者は本誌26号記載の前稿でも特別な“塗駕籠”に載って、天下の険・矢の川峠を越えた花蹊の熊野詣を採り上げた。非日常体験を尊ぶ冒険家の花蹊は高齢にもかかわらず今回も、平安絵巻の牛車ならぬ、野性味溢れる“荷馬車”に跨がって浅間山麓の奇観・鬼押出しに向かう苦難の道を取って選択したのである。

実は積極果敢な花蹊の足跡を辿る旅を念願としながらも未だ果たせずにいる臆病者の筆者は緊急事態宣言解除後、約1ヵ月経過し、今問題のオミクロン株も登場して来っていない令和3年11月3日、恐る恐る禁断の総武国境を越え、初の都内散歩を試みた。国立公文書館に向かう途中、皇居北の丸公園付近で偶然に乗馬姿の雄々しい北白川宮銅像と遭遇し、途端に愛馬家の宮が浅間東麓一帯に営んだ広大な吾妻牧場の往時の勇姿を想起した次第である。この吾妻牧場の位置は花蹊が目指した鬼押出しにほど近く、跡見学園の現・北軽井沢研修所にも近い。なによりも跡見学園所有の浅間演習林こそ、ズバリ北白川宮家由来の由緒ある地2)なのである。

さらに鉄道を愛好する筆者にとって特別な“聖地”ともいべき草軽電気鉄道が、この浅間東麓一帯を走り抜けていたのだが、当該私鉄設立母体の一つが北白川宮家牧場の払い下げを受けた民間企業という因縁もある。根っからの関西出身の筆者にとって軽井沢一帯の高原は縁遠い、いわば「高嶺の花」であったが、幸いにも昭和34年8月5日に草軽に全線乗車するという絶好の機会に恵まれてからというもの、この奇妙奇天烈なる独特の形状の電気機関車（後述）に魅せられ、すっかりこの種の軽便鉄道の妖しい魅力に嵌まって今日に至ったという個人的な奇縁もある。

また尊敬する「鉄道唱歌」作詞家・大和田建樹先生の御導きでもあろうか、跡見学園に奉職して以来、幾度も上記研修所に宿泊したり、当地の開発史・別荘史全般にお詳しい安島博幸、老川慶喜両教授からの直々のご教導の機会にも恵まれた。とりわけ老川教授のご尽力で研修所が所在する長野原町当局との連携協定が締結されて以降、地元の各分野の方々とも直接交流する得がたい機会を幾度も与えられた次第である。

先人による優れた別荘史研究の蓄積が多々ある中で今回も跡見校友会泉会の格別の御許可を得て、前稿と同様に花蹊記念資料館職員各位による真摯な探索の成果として跡見校友会泉会誌『汲泉』記事をはじめ貴重な所蔵資料多数のご提供を戴きつつ、身の程知らずながら学祖花蹊と軽井沢・浅間山麓との深い縁の跡を探索することとした。

穴戸實氏の『軽井沢別荘史』3)には「大正末の日本人の名士の別荘」として愛宕山地区に三井別邸、福原男爵、望月小太郎（後述）らとともに跡見李子を例示している。（穴戸,p267）

またこれより古く、大正11年再版された『かるみざわ』の著者・佐藤孝一は巻末に「附録 著者より読者へ」を設けて「こ



【写真-1】「会長御染筆」

（『汲泉』第48号口絵、大正5年10月所収）

こに収むる三篇は著者より読者への贈物である。この三篇はかつて著者が跡見花蹊、李子、玉枝女史に随伴して妙義山、浅間山熔岩流、内山峡を探った時の収穫である」として「一、山中の梅酒（妙義紀行一大正四年八月の旅）。二、高原の陸舟（押出紀行一大正五年八月の旅）。三、朧水の長者（内山峡紀行一大正五年八月の旅）。」（佐藤、附,p1）の3篇を収録した。

かなりの研究蓄積がある外国人別荘の調査領域に加え、軽井沢等のごく初期の日本人別荘主が如何なる職域階層の人々で、如何なる情報や人脈等に誘導されて別荘を持つに至ったのかを個別具体的に解明していくことは本邦の別荘形成の過程を分析する上でも甚だ興味深いテーマである。その意味で軽井沢別荘形成史研究の地元側キーマンともいべき佐藤孝一という優れた“観光デザイナー”が花蹊の軽井沢別荘生活の端緒に直接深く関わり、しかも佐藤孝一自身の筆になる複数の紀行文が旅行の直後にまず校友会誌『汲泉』に寄稿され、長文にもかかわらず掲載された事実は、観光に関連する学部を擁する本学にとっても名誉であり、意義深いものと考えらる。



【写真-2】 花蹊（中央）、李子（左端）ら
大正5年8月、霊秀山荘にて
（花蹊記念資料館所蔵）

II. 跡見花蹊の軽井沢での避暑体験と支えた人脈

花蹊日記の大正3（1914）年8月8日に「李子よりすゝめられて軽井沢へ避暑のつもりして準備する。平田照子より軽井沢佐藤実へ聞合する」とある。

この直後、8月9日～15日の間、日記の記載はないが、8月17日花蹊は閑院宮に「拝謁して軽井沢の御咄し申上」（日記）げており、日記帳を持参せず予定通り「軽井沢へ避暑」に行ったことが判る。従前の花蹊は「幸ひこの年になっても気力衰へず、身体健康でございますから、態々転地療養などする要を認めません」4）、「暑中だからと言って避暑どころか、用事は沢山あります…暑中は山水の美に接し、自然の気を殊更受けないでも、自分の邸内で…志気を養ひ、日常出来ない仕事を果すことにして居る」5）と書いていた。そんな自宅重視派の花蹊であったが、大正初期に何故か心境の変化を生じた様子である。

本稿では花蹊の日記等に登場する以下の軽井沢関連と目される人名を手掛かりに花蹊に心境の変化を生じさせた過程を推測していきたい。日記の登場順に列挙すれば、

- ①島田三郎、信子（大正3年7月28日避暑を聞く）。
- ②平田照子（大正3年8月8日「平田照子より軽井沢佐藤実へ聞合」）。
- ③軽井沢・佐藤実（大正3年8月8日「聞合」）。
- ④鶴屋主人・佐藤孝一（【写真-2】新築に関与した右上の男性が④又は③の佐藤かと推測）

（大正3年8月16日「鶴屋主人案内にて、地所の売ものありて見分＝行」）・「九臯氏」（大正5年8月28日同行）、「鶴や」（大正5年8月30日見送り）。

- ⑤裏松千代子6）夫人（大正4年8月10日李子と軽井沢同行）。
- ⑥古市7）夫人、嬢（大正5年8月30日見送り）。
- ⑦市村一郎（大正5年8月27日来荘）、市川（市村の誤記か）（8月30日見送り）。

①の島田三郎は野党・同志会所属代議士で大正2年財団法人私立跡見女学校理事に就任した。渡米経験あり、夫婦共洗礼を受けていた島田は大正5年12月財団法人に認可された軽井沢避暑団理事に古参別荘主たる八田裕二郎、藤島太麻夫と共に就任した数少ない日本人別荘主でもあった。副団長の八田は「華族に別荘を紹介する仲介役」（宮原,p230）たる日本人第一号別荘主として知られる。大正3年「実ニ此夏の炎熱三十年来と云」（8月2日）猛暑の最中、7月28日花蹊が島田三郎、信子夫妻を訪問した際、直に「本日より軽井沢へ避暑旅行之由」（7月28日）を聞き出している。跡見別荘完成の翌々年の大正7年1月3日にも年賀で「衆議院官舎 島田三郎氏を訪て、御夫婦にも逢て帰」り、大正7年8月17日避暑中の「軽井沢島田氏へ書をよす」など夫妻との縁は続いている。親交ある信子夫人だけでなく、これから毎年恒例の軽井沢へ出立直前の島田三郎本人から、恐らく高原の涼しい気候や避暑生活の効能を大いに推奨され、根が好奇心旺盛な花蹊のことゆえ未知なる軽井沢の風物に心動かされた可能性もあろう。

さらにいえば花蹊は大正3年8月8日の日記に「李子よりすゝめられて軽井沢へ避暑のつもりして準備する」と書くので、跡見家における軽井沢避暑の発案者でリピーターこそは養子の李子であって、別荘完成後の翌大正6年夏も留守番に回った花蹊は李子からの強い勧奨で受動的に腰を上げた形にも見える。従って跡見別荘の誘発者はむしろ、より若い世代の李子側の人脈

の別の誰か（たとえば日記に名前の挙がっている軽井沢体験者らしき平田照子や別荘完成前の大正4年時点の軽井沢への同行者である広橋寿子、鷲田静子などとも共通の知人である軽井沢別荘主）と想像され、上記の島田三郎夫妻らは花蹊による同意行為の誘発者であったのかもしれない。

③の佐藤実⁸は地元の町村議員、森林組合監事等を兼ねる南1の古参別荘主（佐藤,p104）で山林業等にも関与し、明治45年1月請負業者の後藤良造、土屋信松らと「重久会」を発足（町誌,p638）させるなど、当地の別荘建築面での接点も多く存在する。大正5年8月26日花蹊、中根、朝倉の「三人連」で軽井沢の別荘を初めて訪れた際に、一足先に到着していた「李子、内海、浦四三子」と共に軽井沢駅に「迎ひに来り」、一行を「電車にて新荘に」案内した人物である。

また軽井沢での避暑を計画し始めたころ平田照子より最初に問合せを行った人物であり、当然に軽井沢の避暑生活・貸別荘等の諸情報を発信する立場にあったと思われる。この旅行で8月30日帰宅する際にも居残った「李子をはしめ、古市夫人、嬢と市川氏、佐藤実、鶴や、停車場まで送られ」（日記）ており、末尾に付された業務として儀礼的に見送ったであろう旅館「鶴や」関係者とともに当該別荘新築に関して何らかの役割を果たしたものと推定した。

⑦の市村一郎は明治3年生まれ、日露戦争復員後の明治38年12月新設の新軽井沢郵便局長に就任した。大正5年8月27日新しい別荘に落ちついたばかりの花蹊らの許を何らかの所用目的で早速に訪れたのが花蹊は初対面の「市村一郎氏」と既知の佐藤孝一であった。花蹊が帰京する8月30日「十時の汽車にて、李子をはしめ、古市夫人、嬢と市川氏、佐藤実、鶴や、停車場まで送られ」（日記）た人物で、親しくなった「鶴や」より上位に記載しており、別荘完成の翌々年の大正7年5月28日にも花蹊は「軽井沢市村へ書をよす」とある。したがって筆者は市村と跡見家との関係は一時的・単発的なものではなく、後年市村と別荘主・尾崎行雄との長年にわたる親密な関係⁹）にもみられるように、跡見家の別荘建築や不在中の細々とした別荘管理などを委任する継続・反復的な関係ではなかったかと考えている。

「軽井沢最初の工務店を開業した」（穴戸,p165）後藤良造は世話好きで、自ら「自転車で別荘廻りをして、何かと気配りをする…と、新しい建主を紹介される」（穴戸,p165）営業スタイルであった由だが、花蹊一行を丁寧に送迎した佐藤実、市村一郎らが多忙な工務店主の分身ないし連携関係にあるシンパであったと仮定すれば、跡見家が後藤工務店に発注する道筋も見えてくる。

筆者は最初の問い合わせを行った佐藤実ルート、前年の別荘候補地の案内をした佐藤孝一¹⁰）ルートに加えて、新軽井沢郵便局長の市村一郎という地元名士も、そのルートで後藤工務店などの地元業者の紹介を受けた可能性があるものと推測している。

いずれのルートが正しいのかあるいは相互に連携するのかを確定するだけの資料を欠くが、大正初期の軽井沢の対外的窓口となった名士達がいずれも別荘生活初体験の跡見家を優しく、親切に、心温かく迎え入れる、ホスピタリティ溢れる人々であったことは間違いない。

次に花蹊が軽井沢での避暑を構想・着手し始めた大正3～4年という時期は軽井沢にとってどういう時期かという点、

- ①6月に現星野リゾートの祖・二代星野嘉助が旅館業を開業（町誌,p641）。
- ②7月に長野電灯が開業、旧軽井沢一帯の952灯点灯（町誌,p257）。
- ③翌年別荘分譲を始める横浜の貿易商・野沢源次郎が転地療養で来村、長期滞在（町誌,p641）。
- ④大正4年7月草津軽便鉄道が新軽井沢～小瀬開業。など、都会に住む日本人が別荘開設を可能とするインフラがようやく整備され始めた黎明期にあたる。
- ⑤堤康次郎の箱根土地による千ヶ滝などの大規模別荘開発が本格化し、軽井沢が大きく変貌する直前に該当する。

そして軽井沢を最初に紹介した一般書を著した地元民こそが花蹊の軽井沢別荘生活を丹念に紹介した佐藤孝一その人であった。佐藤孝一は「夏の期間だけは、宿屋の亭主と云ふ世事辛い職業に携はつて」（長者,p34）いながら、「数年前から…地方の名勝誌や遊覧案内」（長者,p35）等をはじめ後世「つるや文庫」とも称された膨大な書籍（実弟の不二男より町立図書館に寄贈）を蔵する読書家・知識人であったため、「誰の別荘からでも…ピクニックか山登りの相談」（長者,p34）を受けるのが常であった。

佐藤は「古老から聞き出した避暑地の黎明期や、明治末期における外国人の避暑生活の様相が活写」された地元住民による著書として定評のある『かるゐざわ』（明治45年8月初版、大正11年6月再版）の著者で、九阜亭主人と号した。

この道の第一級の人物自身の道案内・名解説を受けつつ、周辺の碓氷峠、小瀬鉱泉、妙義山等を含め広く当地の名勝旧蹟を探勝するうち心境の変化を来たしたのか、軽井沢での避暑生活の最終日の8月16日、驚くべき行動に出た。「朝より帰京の準備と」のひて、鶴屋主人案内にて、地所の売ものありて見分三行。場所も三井氏¹¹）の隣にて四方山にて至極風色ニ富たり。一千坪畑地、一坪六拾五銭と云。場所を見て帰。十一時四拾分発之汽車にて、送らるゝ人々に話別して帰。風清き夏なほし

らぬ軽井沢離れかたきはこのはなれ山」

この日記から推測できることは①「夏なほしらぬ軽井沢」の涼しい気候に「離れかたき」好印象を抱いた。②長期の宿泊先は旧軽井沢の「つるや」12)。③1週間の連泊の間に「つるや」佐藤孝一との親交（後述）を深め、④跡見家側から当地別荘にも関心ある素振りを見せた結果、⑤万事に世話好きな鶴屋主人自ら物件の案内役を買って出たといった展開である。

何かと慌ただしはらずの最終日、汽車の時刻も迫る中でわざわざ「地所の売ものありて見分ニ行」つたのであり、しかも閑院宮に「御咄し申上」げた楽しい話を日記に1行も追記しないのにもかかわらず、物件の詳細をわざわざ日記に載せたのは花蹊としても別荘保有に相応の関心があった証拠であろう。物件の場所は著名な三井別荘の近傍の愛宕山麓、地目は畑（更地）、面積約一千坪地、坪単価65銭、総額650円前後で、「四方山にて至極風色ニ富たり」と好印象を抱いた。

Ⅲ. 大正3年、大正4年の小旅行

大正5年8月時点で「跡見先生の一行が、軽井沢へ来始めてから、丁度今年が三年目」（長者,p35）と書いているので、大正3年8月が花蹊が軽井沢で避暑を体験した最初であって、その中で「旧宿」に泊まっていた小旅行である大正3年は「碓氷峠へ登って、武尊歎詠の古蹟を吊ひ、そして力餅を食べた。又小瀬の山中に行つて、湯の宿13)で山蜂に襲はれた」（長者,p35）とある。ヤマトタケルが東征の折に弟橘姫を迫慕し「吾婦はや」と歎詠した地と伝承された碓氷峠の名物が有名な「碓氷貞光の力餅」である。

時期は草津軽便鉄道が離山北麓を大きく迂回して鉾泉から約1キロ手前の小瀬駅まで開業した大正4年7月22日の前年であり、文字通り幽邃境の秘湯の宿であった。はたして花蹊一行が実見し、翌々年の荷馬車（後述）の如く珍奇な乗り物に便乗できたかは日記に記載を欠くので一切未詳であるが、すでに杳掛駅の北方・杳掛貯木場から湯川に沿って白樺林の中を延々と旧国境平駅付近の小瀬事業所まで岩村田営林署の【写真-3】と同様なタイプの木材搬出用手押軌道（町誌,p637）14) が明治44年には到達していたはずである。



【写真-3】「浅間山麓塩野山国有林官行造材丸太搬出軌道」（『信越の国有林』長野大林区署、筆者所蔵）

翌大正4年には「妙義紀行」などが生まれた。日記から「妙義紀行」に相当する時期の記述を搜すと、「八月八日 辛未 日曜 晴。此夕、少雨あり。

朝六時五十分上野発汽車にて、広橋寿子、鷺田静子、雨宮、外女中付添て軽井沢ニ行」（大正4年8月8日）とある。

「八月十日 癸酉 火曜 雨。

李子、朝六時五十分の汽車にて裏松千代子夫人と共に軽井沢ニ行。雨を冒して出立す。八時頃」

「八月十五日 戊寅 日曜 陰。

…裏松千代子夫人より電話にて、本日軽井沢より帰着にて、李子よりの言伝にて是非一度軽井沢へ来る様との事也」

「八月十九日 壬午 木曜 晴。90(度)。

早苗、辰子、朝六時五十分汽車にて軽井沢へ行。予、八時より閑院宮へ参る。」

以上の日記から軽井沢に行ったメンバーは①李子、裏松千代子夫人と、②先発組の広橋寿子、鷺田静子、雨宮と、付添人、③後発組の早苗、辰子であった。

これに対して「大正四年八月…日午前十時」15) に始まる「妙義紀行」の登場人物は①先発隊の佐藤を指揮官に「日蔭に育った細い人と、三人の小茶目さん」（佐藤附,p1）に相当する「寿子さん、静子さん、早苗さん、辰子さんの四人」（佐藤附,p8）と、②本隊の「二人の中婆さん」（佐藤附,p1）である「＜李子＞先生と雨宮さんの二人…番頭さん」の計8人であって、8月15日先に帰京した裏松は含まれず、両文献間には整合性がある。はっきりしていることは李子から「軽井沢へ来る様」勧められた筈の花蹊は家族の中で何故か軽井沢・妙義山に行かない少数派の女性陣に属したことである。

Ⅳ. 別荘地取得の経緯

では花蹊にはいかなる重要な仕事があったのかと日記を探ると、驚くべきことに李子の帰宅日に東京府下北郊長崎村に外出、それも以下に見るようにどうやら軽井沢とは別の近郊別荘候補地の下見らしいのである。

明治19年にも白子の地を訪れて気に入ったとされる花蹊は、この時点ではどうやら道中を汽車の煙りで悩まされる遠方の軽井沢よりも、「便利もよき」な近郊の長崎村に別荘を建てる男性陣主導(?)の案に幾分傾いていたような節がある。「八月二十六日 己丑 木曜 晴。夕景より大雨、交雷。朝食後早、予、泰、弘、石山四人連にて、落合長尾氏を訪ふ。長崎村之地所をみる。長尾御夫婦と同行にて、眺望もよく、此辺にて一番高き場所16)、便利もよき」^(朝)にて、先づ取究る模様也。夫より直帰。李子及同行人一同、無事帰着。上野着三時四十分」との日記の記載は解釈に苦しむ。

長崎村地所の見分当日の午後、軽井沢で別荘候補地の話を相当程度まで煮詰めて帰宅した李子は当地での詳細な報告を行い、花蹊にも「是非一度軽井沢へ来る様」、強く言伝したほど熱意を見せていた李子からは当然に軽井沢案の推進論が出されたはずである。もとより議事録等もない跡見家のプライベートな家族会議での発言内容を知る由とてないが、当時男性陣の軽井沢行の記載が見当たらず、長崎村で「先々取究る」^(朝)つむりの泰、弘17) らからも相応の意見が出され種々意見交換されたことであろうかと想像している。その結果、最終的には花蹊が「よき」^(朝)と感じた長崎村の方ではなく、李子が現地にも出掛けて納得してきた軽井沢の案に落ち着いたようだ。

佐藤・斉藤両氏は「日本人上流階級による避暑慣習の受容が1910年代末から本格化した…一方…湯治の風習を介して普及した海水浴と比べ、高原の避暑慣習が日本人には受け入れ難かったことが伺え…受容者は絞られ、時期も遅れると言えよう」(佐藤・斉藤,p16)と結論づけた。恐らく同じ江戸時代生まれの女性同士とはいえ、天保11(1840)年生まれの花蹊と、慶応4(1868)年生まれの李子との間、あるいは女性陣との男性陣との間に高原避暑慣習の受容の程度、端的に言えば同様「軽井沢ブランド」の評価等に若干の温度差があっても不思議ではあるまいかと想像する次第である。

軽井沢別荘地取得に関して李子の積極性・主導性を窺わせるものとして当該「畑三反三畝一步」が李子ら一行が帰着した8月26日の約半月後の「大正四年九月十三日付ノ売買契約証書ニ依り東京都小石川区柳町二十七番地跡見李子ノ為メ所有権ノ取得ヲ登記」(閉鎖登記簿)された事実を挙げることができる。

旧土地台帳によれば当該物件は以下のように売買されていた。

- ①肥田昭作(神田区今川小路) 明治22年10月
- ②川本清一(本郷区本郷) 明治37年8月
- ③小坂順造(長野県柳原村) 明治37年10月

肥田は銀行家、鉱業家、川本は幕末の理化学者、開成所助教であった。直接の売主・小坂順造は明治36年輕井沢に土地を取得した小坂善之助の長男で信濃毎日新聞、長野電灯各社長、信濃銀行常務等を兼ねた。このうちA.C.ショー、D.M.ショーから継承した小坂邸は初期邦人別荘の一つで、長男の順造は大正5年ノーマンらが結成した「軽井沢避暑団」設立委員でもあった。三井合名役員で三越常務の朝吹常吉も当初「小坂順造氏の別邸を拝借」(宮原,p255)したから、知人への斡旋目的で近隣の地所をストックしていた可能性もある。本命の「つるや主人」周旋以外でも、花蹊が親交のあった島田三郎から「軽井沢避暑団」の団員同士の小坂順造所有地の情報を紹介された線もありえよう。

しかし花蹊が一旦は気に入った長崎村近辺での避暑別荘建築構想を完全に断念したわけではない内心の逡巡は、後年白子の地を「先生の慰安所を求めてさしあげる」18)と在校生から贈られることになる経緯からも窺える。結局花蹊の迷った東京近郊・軽井沢2案の候補地はその後、場所こそ少し異なるものの、現在の新座キャンパス、北軽井沢研修所と形をかえて後継者の手で共に門下生たちの「まなびや」として2つそろって実現することとなる。

V. 愛宕山周辺の別荘開発

大正5(1916)年8月24日「此夜、予、軽井沢行決す」

8月26日「朝六時五十分、上野汽車にて、軽井沢行。一行、予、中根、^(朝)浅倉と三人連。熊谷辺にて雨ふる。やかて晴たり。妙義山、面白う雲のかかりて、

あら妙義面白の雲や秋の色

隧道の秋ハさそと此秋必すと、此山に約したり。程なく臼井に着。李子、内海、浦四三子、佐藤実など迎ひに來りて、電車にて新荘に着」

愛宕山は旧軽井沢地区を四区に分けた場合の北区に属し、佐藤孝一によれば「一ノ字山、愛宕山一帯の中腹及び麓野を云ふ。ことに愛宕山腹は望景広闊にて四区中随一の別荘地と称せらる」(佐藤,p57)とされ、三井別荘等があった。

山頂に愛宕神社をまつる愛宕山は展望に優れ、「愛宕神社、金毘羅神社、馬琴岩などの景物あり。殊に愛宕社頭の展望最も広く、軽井沢高原の風物を悉く一眸に萃む。山腹及山麓の高瀬沢、愛宕道は此区の好別荘地。月夜涼風に浴して、別荘の灯影点々、荒草の中に明滅する麓野を逍遙すれば…」(佐藤,p148)と、軽井沢の十二勝「愛宕の虫声」が名文で紹介され、

以後の類書（稲垣,p61）にも引用されている。

明治38年生まれ愛宕山に暮らした幅北光は「愛宕山は…軽井沢でもいちばん古い別荘地で…道は明治時代のままで、人力車で往復していた山道」19)で、「愛宕山に登る三筋の道路はみな、つるや旅館の裏道と通じている」20)と指摘する。

大正5年8月26日の日記に「座敷より見たる処、愛宕山、浅間山の山間ニ人家ホツゝ五、六軒もあり。真に山水中図の如し。是軽井沢第一の風色と云へし。

予、此宅を靈秀山荘(と)命名したり。午下、みな愛宕山に登る」とある。

大正4年の長崎村の現地調査の際にも花蹊は求める別荘は「眺望もよく、此辺にて一番高き場所、便利もよき」との3条件を挙げたが、愛宕山麓で眺望も良く、しかもつるや旅館をはじめ旧軽井沢の中心街からもほど近い立地は申し分なかったようだ。靈秀山荘の座敷から愛宕山と浅間山の間の数軒の人家が望める位置はまず愛宕山の南東麓方面と思われる。大正13年跡見教員と思しき校友会員「われもかう」の書いた「軽井沢紀行」には「旧軽井沢に下車、同地二百三高地跡見別邸」（紀行,p87）とあり、「跡見別邸」を訪れた関係者の間で日露戦争の戦跡に因んで「二百三高地」と呼んでいたことが推定される。筆者はこの数字は軽井沢特有の別荘番号21)と見当をつけ、軽井沢町立図書館収蔵の戦前期の各種『軽井沢地図』（野沢組地所部など発行、佐藤不二男旧蔵）を参照した。一部の地図には別荘番号に加え一部は持主が載っているので、別荘番号203を捜すと、大正10年の『軽井沢別荘案内地図』（縮尺5000分の1、出版者不詳）には旧中山道沿いのつるやの南西角を右折（または旧郵便局・現観光会館の東北角を左折）、神宮寺に沿って愛宕山参道（英文atago lane、現「愛宕山通り」）を登り、最初の四つ辻でwater wheele road（現「水車の道」）へ左折すればすぐの細い道の登り口が別荘番号「201」で、その北隣の別荘番号こそ正に「203」である。大正15年1月発行の『軽井沢地図』では愛宕山南側一帯に200番台22)の別荘番号200～299が振られ、南隣の「201」は「福原男爵」（E.ライアソンから継承した別荘主・福原俊丸）、「203」は確かに「跡見女史」とある。

VI. 靈秀山荘

つぎに別荘地の周旋・建築面に注目したい。まず大正期の軽井沢の地元サイドは盛んに日本人別荘誘致に注力中で、第一段階の貸別荘に関しても「条件など詳しく認めて旅館に問ひ合はすをよしとす。旅館にては充分に責任を帯びて、便宜を計り周旋の労をとる習慣」（佐藤,p66）であったとされる。跡見家側が最初に接触したと思われる佐藤実村議や「つるや」（佐藤孝一ら）側で眺望を好む花蹊の希望条件に合致する以下のような愛宕山麓の物件の「周旋の労をとる」のは極めて自然であろう。

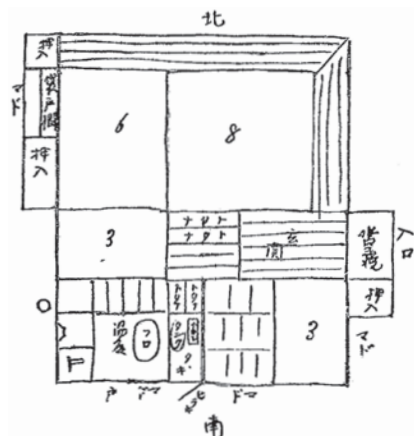
宍戸實氏によれば愛宕山南側は神宮寺（軽井沢646）と佐藤元治郎との所有林を「大工ニテ建築受負ヲ為シ信用」23)ある「後藤仙八と良造の兄弟が目をつけて、神宮寺や他の地主と交渉して借地による別荘地開発を始めた」24)という。佐藤・斉藤両氏が「日本初とも言える分譲別荘地開発」（佐藤・斉藤,p16）と位置付けた後藤兄弟の開発は明治43年の大洪水で別荘群が破壊・流出・浸水の被害を被り、外国人が浸水の恐れのない安心な山麓などに別荘を求めたため予想外の売行きとなった。試みに高瀬愛宕山1342番の山林210,608町歩の土地台帳を閲覧すれば佐藤元次郎と後藤仙八とが鷹見正雄から買収した明治45年9月1日以降大正7年9月まで、十数回に亘り小区画の分筆すなわち別荘主への分譲行為を継続している。分筆のピッチは大正5年3回、大正6年6回と大戦景気の別荘ブームを見事に反映している。

【写真-4】は「^(ママ)秀靈山荘（軽井沢に於ける新築別荘）」と題された竣工直後の写真である。

【写真-5】の大正13年時点の間取り図（紀行,p88）と対照して、縁側に囲まれた東側角の眺めのよい8畳間に揃って和服



【写真-4】「^(ママ)秀靈山荘（軽井沢に於ける新築別荘）」
（『汲泉』第48号口絵、大正5年10月所収）



【写真-5】「山荘の間取り図」
（『汲泉』第69号88頁「軽井沢紀行」、大正13年7月所収）

姿の花蹊ら一行が集合し、右端には万事に世話を焼いた佐藤らしき男性の立ち姿も写っている。

【写真-4】には茫漠たる山林原野しか見出せないが、大正13年には「森や林の彼方此方に点点として、簡素な文化的別荘が散在して…半分以上は外国人」（紀行,p89）となって、大正中期の別荘ブームで変貌を遂げた様子がうかがえる。佐藤・斉藤論文では1910年代に対象区域で別荘用地を取得した21名の属性を調査し夫婦どちらかが3年以上の海外経験あるものが8名あったとし、別荘建築の面でもあめりか屋が設計した豪壮な邸宅を建てる傾向も指摘した。（佐藤・斉藤論文,p14～15）

跡見家の別荘は上記の主流派には属さず、屋根が柿葺きの伝統的な純和風建築である点である。花蹊の薫陶を受けたであろう「我が旧式の歌枕」（紀行,p93）と自認する歌人「われもかう」も恐らく洋行経験なく、後年俗に「軽井沢らしさ」25）とも評される「あめりか屋」の洋風別荘群を「簡素な文化的別荘」、「バラックの西洋館」（紀行,p93）と違和感を抱いたようだ。

前述の通り棟梁の後藤はトントン葺きを得意としていたので、花蹊が「家の向きから間取の工合共、よく建られ」26）たと大満足した霊秀山荘は高原の厳しい気候に配慮しつつ巧みに「日本人の好みに応じた」（宍戸,p167）後藤あたりが、前述の市村一郎ないし佐藤孝一ルートを介して「われもかう」より一段と伝統的かと思われる花蹊らの好みに合わせてトントン葺きの和風建築も同時並行的に請負った可能性があるのではなかろうか。なお大正期の後藤兄弟の受注先として尾崎行雄など、昭和期にも近衛文磨など「旧軽井沢地区内に数十棟」（宍戸,p267）の存在が先行研究で明らかにされているが、幸いに【口絵2】の江木写真館27）撮影の鮮明な写真や見取図の残る「霊秀山荘」でも請負関係を示す新資料の発見が待たれる。

Ⅶ. 浅間山熔岩流紀行

『汲泉』48号、大正5年10月に九阜「高原の陸舟」として掲載されたこの旅行は花蹊が新築別荘に初めて泊まった翌々日の大正5年8月28日に行ったもので、大正5年9月2日午後、帰宅後の花蹊の許に時事新報記者が来訪し、軽井沢の土産話を聞き出した。翌9月3日「花蹊女史が荷馬車に揺られて 跡見花蹊の浅間山周遊」と「時事新報」押出し行の写真出たり。夜八時五十分、李子の一行着。予、井上、春木、迎ひに行。みな無事着。雨宮ハ熊谷ヘ立寄、一泊」（日記）。

題名の「陸舟」は同行した俳人・浦四三子28）（「待つ宵の君」）が野卑な「荷馬車」に名づけた雅名で、一般紙にも掲載された「花蹊先生が老後の思ひ出に御奮発された押出し紀行は、はからずも『陸舟』と云ふ土産話を作って、門下の人々を賑はした」（陸舟）と当時跡見関係者間での“流行語”となったようだ。

8月27日「朝早起。先居なからの気色、実に面白く、此霊秀をみる。山みな笑ふてわれを迎ふ。清涼はだへによし。市村一郎氏来る。夜、散歩して 鶴屋逢て、明日押出し行を約して帰。」と、山荘の名前にもした「霊秀」と「清涼」を強調した。この点は翌6年8月李子に同行して山荘を訪れた万里伯も老人らしく「実に清涼なる処にて結構なり、然し山登りには降参の外なし」（大正6年8月11日）と同様の印象を語っている。

8月28日「朝五時起て、みな食物、麦湯等の準備して、大八車を引き来る。これに乗て行。予、李子、中根、朝倉、井上、浦四三子、海老原、九阜氏と八人也。行程十里余と云。此道すからの秋の八千草濃き薄き、綾とも錦とも何に譬へん、只^(早)あと眼をなくさむ計也。坂の茶やより、みなをりて、予、李子と車にて行。若^(分)去の茶や、昼弁当をたうへる。」

【写真-6】は花蹊は「小朝間山を廻りて、此時、写真屋にふと逢て、此馬車中を撮影す。偶然妙」（日記）と記し、九阜が午前10時まえ「坂の茶屋」の手前で「浅間山麓の人を捕へて取らせ」（陸舟,p51）た花蹊一行の「記念の撮影」（陸舟,p51）である。

右端の馬方と荷車（＝陸舟）の「車上の御荷物と云ふのは今年＜大正5年＞新しく成つた霊秀山荘の主、跡見花蹊女史の一行」（陸舟,p42）で、右から3人目が花蹊、「七人の女連れの中に唯一人の悍猛な男…は東道の主九阜氏」（陸舟,p43）である。花蹊は日記に「大八車を引き来る。これに乗て行。予、李子、中根、朝倉、井上、浦四三子、海老原、九阜^(早)氏と八人也」（8月28日）と記す。

荷馬車に揺られた一行は「時代を平安朝にとり、此の高原を嵯峨野あたりにたとへ、うす汚い馬力を牛車にかたどり、八人の一行を夫々大宮人にしたら」（陸舟,p45）と空想し、それぞれに王朝風の雅名を付けあって楽しんだ。一行の行程は離山の雨宮邸、杳掛宿、星野鉾泉、坂の茶屋、鼻田の峠、六里ヶ



【写真-6】「陸舟—浅間山麓にて」
（『汲泉』第48号口絵、大正5年10月所収）

原などを経て、目的地の鬼押出しを目指す悪路の馬車旅行であった。

「＜九阜を指すワレモコウの＞朝臣は此の豪家の裏山を指した…これは雨宮夫妻の銅像で、其下の豪家らしい建物は同氏の邸宅である」（陸舟,p45）と沿道の風物を次々と名解説を続けていく。

杳掛宿のますや、ゑびすや、小松屋など旅籠屋の「二階の出格子には、一新講とか、浪花講とか、何々御定宿などゝかいな古い招牌のかゝってゐる」（陸舟,p47）と「古駅の物淋しさ」（陸舟,p47）に着目し、九阜が「杳掛の駅に…神風丸と云へる葉うる家あり…」（陸舟,p48）など滔々と「古駅の文学を講演」（陸舟,p48）した。「やがて道は湯川の上流に沿ふ…星野礦泉のあたりで流に分かれ」（陸舟,p49）た。

記念撮影後、花蹊、李子兩人を除く5人は「坂の茶屋」で荷馬車から降りて1時間20分かけて2里弱の鼻田の峠の「峯の茶屋」（浅間登山口）まで歩き、「六里ヶ原」を見渡す。

花蹊は日記に「行程十里余と云。此道すからの秋の八千草濃き薄き、綾とも錦とも何に譬へん、只ゝあゝと眼をなくさむ計也。坂の茶やより、みなをりて、予、李子と車にて行。^(分)若去の茶や、屋弁当をたうへる。」（8月28日）と記す。

花蹊一行の乗ったというか、荷物同様に“載せられた”荷馬車の上には弁当の入ったカゴがある。しかし元来物資輸送目的の荷馬車ゆえ、木製の車輪にはタイヤなどあるはずもなく、湾曲する道路も当然に未舗装の石ころだらけの林道であったから、相乗効果としての乗り心地たるや最悪であったに違いない。「馬力はゴトン、ガタンを繰り返した…陸舟は上下左右に揺れ乍ら、際限のない原を北へへと進む。左は大浅間の直下…」（陸舟,p53）、「馬力は急角度を以て、前後左右に動揺するので…腰を浮かせて柵の縁に緊と取り縋った」（陸舟,p54～55）など、悲鳴・絶句・悶絶の連続する艱難辛苦ぶりに、筆者は思わず産業用電気機関車に牽引された草軽電気鉄道での浅間山麓の旅での同様な非日常体験（後述）を思い出した。

一行が昼食をとった「若去の茶屋」^(分)辺りからが一木一草生えぬ熔岩流が始まり、2時間40分歩いて目的地の鬼押出しに到着した。

花蹊は「山又山に登りて、一望千里といふ、
きはみなき広原、枯木と焼石のみ。

一望千里焼山秋の浅間たけ

漸押出しに着。見る処、実に熔岩畠たる、横半里、竪三里と云。此岩を右を左りとよぢ登而とうへ絶頂^(前)に至る。九阜氏、歴史演舌あり、実に快、云へからす。」（日記）と書いている。

生々しい現物を前に佐藤が天明の大噴火に伴う鎌原村壊滅の悲劇の顛末を滔々と語り、一行の「拍手は熔岩の角々に響き渡った」（陸舟,p59）。この鬼押出しでの現地講義で佐藤の紀行文「高原の陸舟」は終わる。

ここで花蹊は文頭「写真-1」の「熔岩畠ふもとハ秋の千草かな」と詠んだ。日記の方も「麓に岩窟ありて、万年氷をとりて、みな氷をかむ也。所持の麦湯、果物など、この窟にひやして涼をとる。三時こゝを立て行。

熔岩畠麓ハ秋の千草かな

喜寿のをうな押出し山に押上り

^(分)若去の茶屋にて夕食して、又みな馬車に乗る。これから各唱歌、或ハ種々なるをうたひて楽しみ興して、夜九時、山荘に帰。」（日記）と、野趣に満ち溢れ、非日常の極みの如き馬車の旅を締め括っている。

いつもは校長・教員として講義する花蹊もこの日は拝聴する側にまわり、「九阜氏、歴史演舌あり。実に快、云へからす。」（日記）と、鬼押出しでの臨場感溢れる名講義に痛く感動した。帰宅の前日花蹊は「朝とく起て、庭のけしきを詠め、右左、浅間愛宕を庭に入れて、君子気取て山を楽しむ。」（日記）など、名残りきめ山荘に別れを告げ帰京、翌々日花蹊は「実天氣晴朗、暑氣当年之第一、＜華氏＞九十度也。」（日記）と殊更に猛暑が堪える中、閑院宮両殿下に拝謁し「押出しの御はなし申上る。」（日記）ほど浅間山麓の風物が気に入ったようだ。

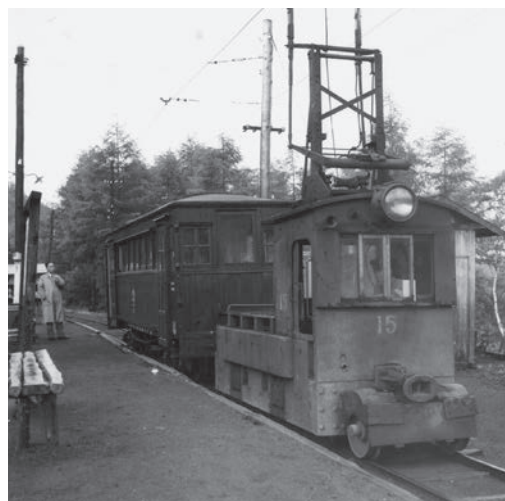
VIII. 校友も利用した跡見別邸と後年の北軽井沢研修所

この花蹊ゆかりの鬼押出しの名勝からもほど近く、浅間大噴火に伴う悲劇を今に伝える「桜岩地藏尊」の傍らに建つのが夏季林間学校・自然観察から近年の観光教育まで多種多様な目的で広く利用されてきた現在の跡見学園北軽井沢研修所・附属演習林である。

「二百三高地跡見別邸」（紀行,p87）で「自炊生活」（紀行,p87）を体験した大正13年7月の校友「軽井沢紀行」著者「われもかう」は「一匡村といふ…一団の文化村が出来て居る。古滝といふ所には、新しい遊園地があつて、妻恋ホテルといふなかへ立派な旅館もある」（紀行,p92）と教員らしく細かく観察した。草軽電気鉄道の分譲別荘地の端に鎮座する「桜岩地藏尊」29は「浅間山大噴火の際土中に埋没せる」（金子）往古の遺物を草軽「鉄道測量の際、地藏川別荘地を貫流する地藏川の上流に於て発見し…本社之れを桜岩に奉祀」（金子）したものである。跡見学園北軽井沢研修所に隣接する桜岩地藏尊こそ、あの鬼押出しの「熔岩の突発、沸泥の氾濫、三十六ヶ村を尽し」（陸舟,p59）た遺跡であることはいうまでもない。

前述の「われもかう」も8月11日「＜軽井沢＞駅前から軽便鉄道によって旧軽井沢に下車」（紀行,p87）、18日「旧軽井沢から軽便鉄道に乗り込む。…途は次第々々に爪先上りになって、小さな^(ママ)汽缶車がポツ〜と登って行くのろさ加減はお話にならない…地蔵川といふ所で下車」（紀行,p90～91）し、鬼押出しに向かうなど草津軽便鉄道（昭和14年4月草軽電気鉄道と改称）が登場する。

【写真-7】は裏に「32年 草軽電車」とメモされた校友寄贈写真であるが、同一写真群に「32.7 浅間寮落成式 祝賀会」が含まれることから、昭和32年の落成式に参列した本学関係者が北軽井沢までの途中駅で撮影したものと思われる。機関士の背にタブレット、列車の透き間から覗くのは同駅に留置されていた戦前期「夏の軽井沢名物として普く世間に評判が高」（稲垣,p66～67）かったオープンデッキ納涼展望車「あさま号」廃車体利用の休憩所でもあろうか。



【写真-7】 草軽電気鉄道の国境平駅あたりで停車中の「デキ十二形」の愛称「カブトムシ」の15号電気機関車と附随客車（学園関係者撮影、昭和32年7月）
（花溪記念資料館所蔵）

IX. むすび

霊秀山荘のその後について前述の別荘地図群を探索すると、遅くとも昭和11年版ではT子爵家（昭和20年6月現地に疎開）の名義に変更されている。T家長男夫人で登記簿での名義人Cは跡見女学校の出身で評議員に就任した女性で、花溪日記にも度々登場する親密な間柄だったことが昭和初期段階での別荘譲渡の背景にあったものかと想像される。

また南側の福原男爵別荘も幾度かの変遷を経て昭和30年には作家古屋信子名義に変更され、多くの作品がこの軽井沢の地から誕生している。当地の華麗な山荘を巡る著名人達のドラマはまだまだ続く模様だが、本稿では立ち入らないこととした。

さて『跡見学園——三〇年の伝統と創造』には昭和26年鍛錬教室を開始したのをはじめ、千葉県鶴原（現勝浦市）の臨海寮と共に、高原寮として浅間寮取得が記載され、昭和20年代後半から学園当局が海と山の両面で臨海・林間学校を通じた自然観察教育に熱心に取り組んで来た経緯が述べられている。（同書,p90～91）

こうした自然教育重視の姿勢の中で、昭和37年浅間山麓（群馬県吾妻郡嬬恋村大字鎌原字大カシコ外）に105,773m（約32,000坪）もの広大な土地を購入し、「演習林として整備」（同書,p91）したのである。演習林とは通常林学の研究や教育のための実習林・実験林をいい、農学部学生には人里離れた山奥の演習林宿舎に泊まり込んでの厳しい現地実習が必修科目であった。明治27年に千葉に演習林を取得した東大をはじめ、林学科を設置していた4の旧帝国大学は国内各地にとどまらず、樺太・朝鮮・台湾など外地にも広大な演習林を保有していた。歴史を誇る跡見学園ではあるが、もとより旧帝大でも官立高等農林学校の系譜でもなく、かつて林学科を設置し林学を必修科目に加えた歴史もない。単に中学・高校生段階からの夏季林間学校や自然観察教育目的のみで浅間山麓に広大な演習林を擁して、彼の著名なる東大秩父演習林、京大芦生演習林等に続くべく学生・生徒らを実地で鍛え上げようと希求した未だ物資も豊かではなかった当時の学園当局の意気軒昂ぶりには感謝のほかはない。

開設8年後の跡見別荘を大正13年訪れた前掲「軽井沢紀行」の著者も「二百三高地は場所といひ土地といひ申分ない所で…希望者を集め、避暑旁夏期学校でも開設されたなら…近き将来に於て、前の様な企が実現せられん事を切に希望する」（紀行,p95）と結んだが、学祖・跡見花溪先生御自らが「高原の陸舟」に跨がり、浅間山に向かって77歳の老軀を厭わず、「喜寿のをうな押し山に押し上り」行かれた自然観察・現地教育の“聖地”なるかゆえの決断であったのかもしれない。

因みに演習林一帯は冒頭の乗馬姿の銅像の主・北白川宮の御料牧場のあった“聖地”でもあって、閉鎖登記簿には「明治三十年四月官有地払下指令ニ付同年四月二十日…北白川宮…払下代価六百三十五円十六銭六厘」との有難い由緒が刻まれている。また北軽井沢研修所の近くの草軽電気鉄道旧北軽井沢駅舎が現存する旧駅前広場にも北白川宮を祭神とする牧宮神社が鎮座しているという念の入った配置状態である。

鉄道とりわけ緑溢れる森林の中をヨタヨタ走る粗末な軌道をこよなく愛好して来た結果、全国各地に残る珍奇鉄道の跡を命ある限り尋ね歩きたいという衝動が年々昂じて行き、草津の湯でも治らぬ不治の病に罹ったも同然の筆者にとって材木搬出用に専用の軌道も備えていた秩父、芦生等の演習林は当然に憧れの“聖地”なのである。山が無い千葉県にも演習林軌道が存在したとの耳寄りな話をこの目で確かめたいと念じると同時に、ひょっとしたら跡見の広大な演習林にも遠大な目論みがなかったのだろうか…と妄想を逞しくする今日この頃である。

最後に「高原の陸舟」に跨がった学祖と同年齢を迎えた筆者自身の夢幻の如き草軽乗車体験の儚き回想で締めくくるのを

許し願いたい。

【写真-7】が浅間寮落成式に出席した校友によって撮影された昭和32年7月の2年後の昭和34年8月5日、当時中学2年生の筆者は炎天下に徒歩でアプト式ラックレールを見学後に「こんどは草軽電車とかいうのにのる。…草軽の軽井沢についた。大きさは神戸電鉄の有馬駅位」30)と感じつつ、新軽井沢発14:40、上州三原17:02着、17:03発、草津温泉行の9列車に乗り、18:15草津温泉着、賽の河原や湯畑(硫黄採取場)を見学し、萩原旅館に泊った。なにしろ旅の経験も乏しい少年ゆえに鉄道の概念を根底から覆され驚愕絶句、老朽化した鉱山用電気機関車が弓く産業鉄道並の劣悪な乗り心地と、全線に連続する曲線のレールにキーツ、キーツとぎしむ車輪の悲鳴音を聞きながら、後年共に日本一周して廻った親友・犬塚京一君と共に車両先頭に陣取って3時間半もの間ひたすら乗車し続けた中学2年当時の筆者自身「草軽電車の快適さ、スマートさ。18世紀的!!」と精一杯の皮肉を込めて記した初の日日常体験であった。聊か手前味噌ながら花蹊ら一行の満喫した前述の原始的「陸舟」の難儀にも一脈相通ずるものがあるように思われる。

翌々7日8:16湯田中発長野野の地方鉄道の雄・長野電鉄(@80円)に乗った際には、一昨日の草軽のボロさ加減に比べ「長野電鉄の電車は…茶色で車体はましかく…感じは20世紀的にスマートに見えた…一昨日、まことに快適でスマートで、振動のほとんどない18世紀的な草軽電車に三時間半ものらしてもらったから、この電車がほんとうにたのしく見えた。(五倍ほどあるか)…車の中はマアマアである。(コレモイツニ草軽電車殿ノオカゲ、アリガタヤアリガタヤ) ロマンスシートではないが、草軽ホドデハナイ。(草軽を比較ニモツテキタラ、ドンナ電車デモヨクナル。草軽サンオコラナイデクダサイヨォッ)」31)と極限の低規格・草軽から受けたカルチャーショックの甚大さを拙い文章ながらも告白している。かくしてご近所にある某テーマパークの鉱山列車より凄くて長い3時間半もの空前絶後の遊覧鉄道旅行を実体験してからというもの、すっかり草軽なるゲテモノに圧倒され心底から魅了されてしまったのであった。

しかし今一度乗車したいとの筆者の切なる夢が果たされることはなかった。実は昭和34年8月14日7号台風により、同社のアキレス腱ともいうべき吾妻川橋梁が再び流失、軽井沢自動車車庫が全壊するなど甚大な被害を被った。この橋梁流失で嬭恋—上州三原間はバスで代行、11月13日新軽井沢—上州三原間の鉄道営業廃止が許可され、昭和35年4月25日新軽井沢—上州三原間の鉄道営業廃止、昭和37年1月31日上州三原—草津温泉間の全線廃止へと事態が急展開したからであった。思えば橋梁流失のわずか9日前に、奇跡的に草軽全線を完全乗車できるという文字通り一期一会の幸運に恵まれたという次第である。

かくて、筆者がたまさか受けた半日間の“鉄道観察教育”の強烈なる影響か、その後の人生軌道を大きく迂回させ、未だに浅間山麓を這い回る夢は醒めやらず、幻の軌道跡を求め枯れ野をかけ廻る始末。若き日の実地教育の効能たるや実に恐るべし。

1) 山荘名の「靈秀山荘」は中国河北省恒水市に名勝地として実在するが、愛宕山麓の「気色、実に面白く、此靈秀をみる」(大正5年8月27日)と感じて花蹊自身が命名した。一方、山水山岳の形容として慣用される美辞麗句の「秀靈」との混同からか、校友会誌『汲泉』をはじめ「秀靈山荘」と表記した文献も散見される。本稿では花蹊本人の意志を尊重し「靈秀山荘」で統一したが、引用箇所に関し原文通りのままとした。

2) 長野原学研究会の活動として当該牧場の地籍調査を試みた閉鎖登記簿甲区の記載(後述)。

3) 本稿では宍戸實『軽井沢別荘史 避暑地百年の歩み』住まいの図書館出版局、昭和62年を単に宍戸と略したように頻出資料は以下の略号で示し、慣例の『跡見花蹊日記』[全5巻](学校法人跡見学園、平成17年。)からの引用は年月日のみとした。

佐藤…佐藤孝一『再版 かるみざわ』丸善、大正11年8月3日、(初版は大正元年8月4日、教文館)

陸舟…佐藤九臯「高原の陸舟(押出記行)」大正5年9月22日、『汲泉』48号、大正5年10月。(佐藤、附録,p20~36に転載)

長者…佐藤九臯「朧水の長者(内山峽紀行)」大正5年10月15日、『汲泉』50号、大正6年5月,p33~54。(佐藤、附録,p37~56に転載)、

妙義…佐藤孝一「山中の梅酒(妙義紀行)」大正4年8月、佐藤、附録,p1~20。

金子…金子常光画『草津軽便鉄道沿線案内』日本名所図絵社、大正12年。

紀行…われもかう(教員たる校友)「軽井沢紀行」『汲泉』69号、大正13年7月,p87~95。

稲垣…稲垣虎次郎(漂萍、軽井沢郵便局長他)『大軽井沢の誇り 草津温泉の誉れ』昭和9年。

町誌…『軽井沢町誌 歴史編(近・現代)』昭和63年。

宮原…宮原安春『軽井沢物語』講談社、平成6年。

佐藤・斉藤…佐藤大祐・斉藤功「明治期・大正期の軽井沢における高原避暑地の形成と別荘所有者の変遷」『歴史地理学』46(3)、平成16年6月。ただし、当稿の調査対象とした小字には山荘のある「大久保」は省かれて

いる。

花里俊廣「戦前期の軽井沢の別荘地における外国人の所有・滞在と対人的環境の様態」『日本建築学会計画系論文集』、平成24年 (<https://www.jstage.jst.go.jp/article/aija/pdf>)

- 4) 5) 跡見花蹊『をりをり草』実業之日本社、大正4年,p222~224。
- 6) 裏松千代子は子爵貴族院議員裏松良松の妻、万里小路博房の三女。
- 7) 『婦人週報』個人消息欄に「古市幸子（工学博士夫人）八月五日上野発軽井沢に…」とあることから工学博士古市公威夫人幸子と令嬢か。
- 8) 佐藤実（大字軽井沢756）は大正10年当時の東長倉村の村議、大正12年当時の消防団組頭（町誌,p652）、大正15年9月軽井沢体育協会長に就任（町誌,p656）、昭和4年当時の軽井沢町の町議（町誌,p272,314）。昭和7年3月11日設立許可された林道築設目的の軽井沢土工森林組合初代監事に後藤良造と共に就任（S7.6.27『官報』,p16）しており、後藤と同様に鶴溜・赤岩付近等で山林業を営んでいた模様。
- 9) 市村家所蔵資料には、花蹊と同様に愛宕山下の二手橋近くに別荘「莫哀山荘」を所有した尾崎行雄が昭和8年4月市村一郎宛「庭園の手入れは後藤工務所・後藤良造氏と協議し、よい種子があれば〈市村邸の〉栽華園のために使われたい」（土井永好「尾崎行雄（号堂）関係資料所在調査報告」相模原市立博物館 (<https://sagamiharacitymuseum.jp> 2015/06)、昭和8年6月「いよいよ来月1日には避暑に入りたく…電燈その他が問題なく使えるよう後藤氏と協議、処置を依頼」（同上）する趣旨の封書を継続的に送るなど、市村一郎は後藤工務所・後藤良造と連携して長期にわたり仲良く細々とした別荘管理を分担していた様子が窺える。（なお8月30日花蹊を見送った「市川氏」（日記）は「市村氏」の誤記か。）
- 10) 望月邸の別荘開きに佐藤孝一は旧番号「北31」（佐藤,p100）の古参別荘主・藤島太麻夫〈レーン・クロフォード商会・川村亀善経由、大正9年に取得した歯科医〉らとともに参加しており、当該別荘の周旋に関与した可能性を示している。
- 11) 三井三郎助（三井鉱山社長他）は明治32年広大な別荘を建て、明治45年三井高修が相続、その一角に三泉寮が現存。
- 12) 軽井沢の別荘を入手するまでの3年間、館主佐藤仲右衛門の「つるや旅館」（65間、定員80人）ないし「貸別荘数棟ありて、家族同伴自炊の客に当つ」（佐藤,p64）同附属「つるや二号〜五号別荘」（佐藤,p96）あたりの御世話になったものであろう。

「妙義紀行」の文中には佐藤が朝に一行から今日妙義へ登る約束だと迫られ、失念していた佐藤が虎の巻を取りに「あたふたと自分の居間へ駈けて行つた」（佐藤附,p2）との記述があるので、この折は間違いなく「つるや旅館」に宿泊していたと思われる。

なお佐藤仲右衛門は従前の茶店経営から明治19年ころ旅館業に転じ、多くの文人が宿泊したつるや旅館主で孝一（長男）、不二男（昭和30年十二代町長就任）の父。三度の来訪経験で軽井沢が気に入ったショーは彼の斡旋で明治21年5月旧軽井沢の大塚山に養蚕民家を移転改造し初の別荘を建設。外国人の不動産所有が禁止されていた当時、ショーはつるや一号別荘（貸別荘）に滞在する体裁で別荘を持ったから、つるやのマーケティング上は宿泊・貸別荘・別荘の客層は連続していた。
- 13) 小瀬温泉の宿「蓬莱館（館主 鈴木弥平）」（佐藤,p64）。
- 14) 軌間2尺5寸、延長4,100間で、『東京営林局管内全図』（昭和14年3月調製）では草軽と平行して杓掛野木場から北上する赤色の林道（軌道）（Narrow Gauge Forest Railroad）で表示され、林用だけでなく地場産業たる天然水搬出や親睦行事等でも利用された。軽井沢町立図書館アーカイブには山高帽に洋装の一見地主然とした数十人もの紳士集団が喜々としてトロッコに跨がる山林会等の視察団と思しき撮影時期未詳の上記岩村田営林署軌道便乗記念写真や、氷を積んだトロッコを馬で牽く動画等貴重な映像資料を収蔵。（なお大日本山林会『山林』637号p57の昭和10年10月4日実施の大会視察旅行案内に「菅平、別所温泉泊、軽井沢周遊」の第二コースには「官行造林地…の視察等」が含まれていた。）
- 15) 原文も「八月…日」であるが、紀行文中に「私達は明後日帰る」（佐藤附,p2）とあるので、日記の一行帰宅日「八月二十六日」の2日前の8月24日と判明する。
- 16) 「眺望もよく、此辺にて一番高き場所」の位置は未詳ながら長崎村（大正15年長崎町、現豊島区）には安藤広重の富士三十六景「雑司ヶや不二見茶や」にも登場する眺望の良い鼠山（標高35m）も存在し、また千川上水も近かった。
- 17) 泰、弘兄弟は翌大正5年11月柳町の「学校地所買入之協議」の会議でも、「此辺之地地四十五円、其電車通りなそハ四十三円で近頃買たと云。してみれば、五十円位てハ如何と、弘を以て申込させたれハ、泰云、五十五円にて一文もかけてハ先止メと云。弘も兄の強情に困却したり。止むなく五拾五円にて買得の約定済」（大正5年11月8日）などと活発に発言しており、当該柳町校舎の所有名義人にもなる泰は特に不動産に一家言を持っていた模様。
- 18) 泉雅博・植田恭代・大塚博『跡見花蹊』ミネルヴァ書房、平成30年,p170。
- 19) 20) 幅北光『軽井沢ものがたり』信濃路、昭和48年,p103,p37。

- 21) 別荘番号は登記簿の地番とは別に郵便局が配達の便宜上独自に付した、現在の住居表示の先行ミニ版のような軽井沢独特の制度で、大正15年など何度か変更された。昭和5年野沢組地所部発行、縮尺6000分の1『軽井沢地図』では、同じ場所に「565 跡見氏」とあり、別荘番号が「203」から新番号に変更された模様。
- 22) 200番台には園田男爵、望月小太郎、日向利兵衛〈W.Sホール継承〉、益田信世〈故T.Mマクネア継承の益田孝の子息〉、朝吹常吉、原博士、長与立吉〈C.A.アシモール継承〉ら著名人の別荘が含まれていた。
- 23) 柏木義門・片野真佐子『柏木義門日記補遺』平成13年,p254。後藤仙八（東長倉村）は大正8年では営業税43円、所得税41円を納める南北佐久郡内の有力請負業者（『商工興信録 本州中部地方』商工興信合資、大正8年,p84）、大正11年では「別荘建設・土木一切請負」（佐藤、巻末広告）。後藤良造は大正11年では 仙八との共同広告で「牛乳販売」（佐藤、巻末広告）、大正14年では手広く「建築部、材木部、硝子部、凍氷部…工務所」（土屋孫市編『軽井沢付近遊覧案内図 附浅間登山要覧』大正14年7月）を擁する後藤工務所主で、昭和7年3月軽井沢土工森林組合初代監事に就任（S7.6.27『官報』,p16）。同業者として①山添建築工務所、②石橋今次郎、③佐藤定治、④武久材木店、⑤菊屋材木店、⑥田口材木店、⑦中村近翁が掲載。
- 24) 小字「高瀬愛宕山」一帯の地番の大半は1342由来の枝番で、ごく一部が1341,1340であるにすぎないことから、神宮寺所有の大規模な山林開発の結果の分譲地であることを暗示する。また明治44年ごろ愛宕山頂に銅像がある中里藤雄ら地元有志から当局に「愛宕山裾などのところどころに散在していた墓地を…共同墓地」（幅北光『軽井沢ものがたり』昭和48年,p205）化すべしとの進言があり、大正2年雲場原字西梅原に「軽井沢霊園」となって集団移転した。この環境整備が加わって「山腹の愛宕道及び山麓の高瀬方面」の別荘地形成が大正3年ごろから加速したものと想像される。中里藤雄は旧軽井沢で中里材木店を開業、川上林業取締役を昭和4年4月25日退任した。
- 25) 「あめりか屋」が建築した洋風別荘の詳細は矢戸,p155～162参照。
- 26) 別荘取得に関して日記があっさり記述され詳細な経緯が見当たらない理由は、遠隔地での別荘新築と事後の管理など煩瑣で金銭絡みの仕事は高齢で多忙な花蹊よりも、3年前から軽井沢での避暑を強く勧めるなど、より関心を寄せていた李子が主導、主管していたといった家庭内事情があるのかも知れない。
- 27) 後年の資料受入時の関係者添え書きに「軽井沢李子先生の宅（霊秀山荘）大正六年夏撮影」と鉛筆で書かれた江木写真館撮影の口絵2の写真を「軽井沢の写真出来たり」（大正6年8月30日）と日記にある「軽井沢の写真」と同一物と推定した。軽井沢の李子から8月22日「電報来る 二時過ぎ、朝食、新田、上野へ迎ひに行、三時半過ぎ、四時比無事帰着。先々安心々々 長き軽井沢の物かたりなとして」（大正6年8月22日）と李子帰京の1週間後に専門写真館から待望の製品が届いたと考えられる。この江木写真館が夏季に軽井沢にも出張店を出していたかは未調査であるが、岸田劉生もよく利用した明治期創業の東京の著名写真館で大正中期には新橋丸屋町3番地に「江木写真館」の看板を出して営業していた。（明治期にみる江木写真館の仕事 <https://chinchiko.blog.ss-blog.jp>）
- 28) 浦四三子は明治13年4月3日弁護士・政治家、俳人の角田真平（俳号竹冷、大正2年財団法人私立跡見女学校理事就任）の長女に生まれ、明治30年浦香雨に嫁し、秋声会女流の代表的存在。大正6年竹冷の還暦を祝い俳句百吟を英訳した『点滴』刊行。大正7年7月31日花蹊は「朝、角田竹冷氏を問ふ。予、伝記の相談をする。」（日記）。
- 29) 草津軽便鉄道では「桜岩地藏尊は由緒深きにも拘らず、從來殆んど顧みられざりしを遺憾とし…第一回の法会を営む。遠近よりの参拝者多数あり、毎年例祭を営」（『第十六回営業報告書』昭和2年）んで沿線名所に仕立てた。直営の分譲地たる「吾妻避暑地は吾妻牧場の一部にして、之に接続する優勝の地域三百町を画せる本社経営の避暑地にして、風光最も佳也。分割譲渡を受けた地主二百名を超え、現に十余棟の別荘存在せり。桜岩遊園地、桜岩地藏、古滝、石止滝等、又此内に在りて名勝多し」（金子）と宣伝した。
- 30) 31) 筆者未定稿「信濃の旅（仮題）」昭和34年9月頃執筆。

附記 本稿の図版のうち写真-1、写真-4、写真-5、写真-6は跡見校友会泉会誌『汲泉』から許可を得て引用・掲載したもので、跡見校友会泉会の関係各位に厚く御礼を申し上げます。また口絵2、写真-2、写真-7は跡見学園女子大学花蹊記念資料館の所蔵品を許可を得て引用・掲載したもので、金玖氏をはじめ探索等にご尽力賜った資料館各位に感謝申し上げます。なお時期を大幅に逸しましたが、「長野原学研究会」各位に謹んで拙稿を提出申し上げます。